

# 大公・大智・大信・大愛

## ——周恩来総理と池田大作先生の友誼

紀 亜 光

創価大学が開催する、「周恩来・池田大作会見 50 周年記念」シンポジウムにおいて、このような貴重な機会をいただき、大変光栄に存じます。本日は、周恩来総理と池田大作先生の友情について、私なりの理解を述べさせていただきます。

周総理と池田先生の会見は、実際にはわずか 30 分程度であったとされています。その短時間の会見に、果たしてどれほどの歴史的意義があったのかと疑問を抱かれる方もおられるかもしれません。

しかしながら、西園寺先生が先ほど指摘されたように、この会見には極めて深い歴史的意味と、世界を見据えた広い視野が込められていました。すなわち、この会見には、歴史的重層性と国際的視点が確かに存在していたのです。

本日は、この点について、私は次の 4 つの視角から考察したいと思います。

1. 大公結縁（大いなる公益に基づく結縁）
2. 大智立業（大いなる智慧で事業を成す）
3. 大信伝世（大いなる信頼を後世に伝える）
4. 大愛永生（大いなる愛は永遠に生き続ける）

周総理と池田先生の友情は、注意深く味わい、深く考察するに値する、きわめて重要な事例です。一方は中国人、もう一方は日本人であり、年齢差は約 30 歳。一方は国家の総理として政界の中枢に立ち、他方は民間団体の会長として社会を導く立場にありました。また、一方はマルクス主義者、他方は宗教者であり、思想的立場も大きく異なっていました。さらに、両者はいずれも 20 世紀の中日戦争を経験しながら、当時は互いに敵対する陣営に属していたという歴史的背景も共有しています。にもかかわらず、両者の人生における直接の接点は、1974 年 12 月 5 日の、わずか 30 分間の会見のみでした。

これほど多くの相違があり、しかも直接の対面が極めて短かったにもかかわらず、両者の友情は、大海のように広大で深遠なものでした。それは時空を超え、イデオロギーを超え、さらには

---

Ji Yiguan（南開大学マルクス主義学院教授）

本稿は周恩来・池田大作会見 50 周年記念シンポジウム（2024 年 11 月 30 日～12 月 1 日、於・創価大学）の全体会 2「周恩来・池田大作会見の今日的意義」における基調講演に加筆修正を施したものである。

生死をも超越し、中日の平和と世界の友好事業に深い影響を与え、中日関係史において消えることのない美談として刻まれています。

なぜ、これほど多くの違いを抱えながら、これほど深い友情と広大な影響力を持つことができたのでしょうか。

周総理と池田先生の友情は、単なる個人的な親交ではなく、中日友好と世界平和という事業に根ざした、広い公の精神——すなわち「大公」の友情であったと言えます。そこには、多様な文化の中で調和の世界を築こうとする「大いなる智慧」と「真の信頼」、そして「人民本位」という深い愛の精神が貫かれていました。

両者の歴史的会見から50周年を迎える今日、その色あせることのない友情を総括することは、単に感動的な歴史を振り返ることにとどまりません。それは、「百年に一度の大変局」といわれる現代において、危機を好機へと転じ、人類社会が平和と友好の大道を歩みながら、新たな未来を切り開いていくための、きわめて重要な示唆を与えるものです。

## 1. 大公結縁（大いなる公益に基づく結縁）

まず、周総理と池田先生の「大公結縁」について述べたいと思います。中日友好と世界平和の事業こそが、この2人を結びつけた最も重要な絆であり、両者の友情の基盤でした。

1960年代初頭、周総理は、池田先生が率いる創価学会が、中日友好を推進する上で「決して無視できない力」であることに注目しました。これを契機として、周総理は池田先生および創価学会への関心を一層深めていきます。1960年に池田先生が創価学会会長に就任してからわずか3年の間に、会員数は150万世帯から300万世帯へと倍増し、日本社会の各界から大きな注目を集める存在となっていました。

1962年9月から10月にかけて、松村謙三氏と高碓達之助氏が訪中した際、創価学会と池田大作を重視し、「ぜひ友人になるべきだ」と相次いで周総理に進言しました。同年には、周総理に対して池田先生と創価学会について紹介を行っています。

また、当時「中日覚書貿易」の中国側首席代表であった孫平化氏は、訪日後、帰国して間もなく、池田先生と創価学会の状況を特別に周総理へ報告しました。その際、周総理は、池田先生が「若く、勤勉で、『毛沢東選集』を通読している人物」であることを知るようになります。

当時、日本国内では創価学会に対する評価は賛否が分かれており、中国国内でもその認識にはさまざまな意見の違いがありました。孫平化氏の回想によれば、「当初、私たちは創価学会を、非常に組織化された、動員力の強い危険な団体ではないかと考えていた。日本軍国主義復活の可能性が議論されていた時代であり、こうした団体を恐ろしく、危険だと感じていた」と述べています。

しかし、周総理は中国人民外交学会に対し、創価学会について体系的に研究するよう指示します。当時、日本課の所長を務めていた金蘇城氏（後の駐日大使）は、資料分析の結果、創価学会の組織が軍隊のように見え、その本質を把握することは容易ではなかったと回想しています。し

かし、ここで周総理の優れた判断力が発揮されました。周総理は、創価学会が反戦・平和を追求し、大衆の中から生まれた民衆基盤の組織である点に着目し、中日友好を推進する上で無視できない存在であると判断しました。そして、創価学会との接触を図るべきであるという明確な方針を示したのです。

この時期、林麗韞氏（周総理通訳）は「調査を通じて、私たちは創価学会が民衆を基盤とし、中日友好を目指す団体であると認識した」と証言しています。また同氏は、創価学会について「周総理は常に交流の方法を模索していた」と述べています。奇しくも、池田先生も会長就任以降、中日関係の現状を注視し、いかにして国交正常化への道を切り開くか深く模索していました。

1963年、高橋達之助氏が池田先生を訪問し、池田先生が中日友好の新たな推進力となることを強く期待したことを受け、池田先生は「日中友好に金の橋を」という決意をいっそう固めました。池田先生は、中日友好の扉を開くには、政治の力が不可欠であると確信し、1964年に公明党を設立します。中国との国交回復を公明党の最重要外交政策として掲げました。これに並行して、1966年には、有吉佐和子氏を通じて周総理と池田先生の初めての間接的な交流が生まれました。周総理から訪中招待のメッセージが届けられると、池田先生は深く感動し、「このご厚情は決して忘れない」と述べました。

その後、周総理の指示を受けて、創価学会との接触は実質的な進展を見せることとなります。孫平化氏と、当時『光明日報』の東京駐在記者であった劉徳有氏が、東京において創価学会青年部の責任者と初めての会合を持ち、ここから中国政府と創価学会との交流の扉が正式に開かれました。学会側の責任者は秋谷栄之助氏であり、創価学会にとっても、これが中国側との初めての接触でした。会合に先立ち、双方ともに大きな緊張を抱えていたと伝えられています。周総理の一貫した誠意は、池田先生に「いよいよ日中友好を本格的に推進すべき時が到来した」と強く実感させるものでした。

こうした流れの中で、当時の中日関係の緊迫化を踏まえて膠着状態を打破し、正常化へ道筋を切り拓くため、池田先生は、両国が国交を正常化する4年前にあたる1968年9月8日、2万人が参加した創価学会学生部大会において「日中国交正常化提言」を公に発表しました。池田先生はその中で、中国問題を解決するための3つの道筋を提示し、その内容は各界に大きな驚きをもって受け止められました。

この提言は世界各地で大きな反響を呼び、深い歴史的影響を与えました。その後も池田先生は中日友好を粘り強く推進し続け、1969年6月には『聖教新聞』で連載していた『人間革命』の中で、「日中平和友好条約」の締結を呼びかけるなど、あらゆる手段を通じて中日友好の前進に尽力しました。特筆すべきは、この「日中国交正常化提言」が発表されるや否や、周総理が強い関心を示し、この提言をきわめて高く評価した点です。一方で、この提言は日米両国当局の意向とは異なる内容を含んでいたため、池田先生ご自身が危険にさらされる局面も生じました。しかし、周総理はこの提言を極めて重要なものとして受け止めていました。では、周総理はこの提言を、どのような経緯で、またどの時点で知ることになったのでしょうか。

林麗韞さんは、「1968年に池田先生が発表した中国に関する提言の内容は、速やかに総理の手に届けられたと考える。周総理が池田先生の提言を非常に高く評価していたことは間違いない」と証言しています。さらに彼女は、「当時は中日両国の間には国交がなく、真の意味で戦争が終わっていなかった。しかも中華人民共和国は国連に代表権すら持っていなかった。国民の識字率も高くなかった。このような状況下で、池田先生が『日中友好こそ世界平和の鍵である』と位置づけたことは、特に注目に値する」と述べています。周総理も日本のメディア情報を注視していました。私たちが日本最大の宗教団体の創価学会が中日友好の活動を始めたということ、非常に喜んでいました。1970年には、周総理が長野大学名誉教授の菅沼正久氏と会談した際、「創価学会にはどのような特色があるのか」「この学会は普段どのような活動をしているのか」など、30分以上にわたり熱心に質問したと伝えられています。

1971年6月、公明党の代表団が中国を訪れた際、周総理は「知り合うのは遅かったが、長年の知己の如し」と語りました。この発言からは、周総理が、池田先生のわが身を顧みない中日友好への尽力を深く理解していたこと、そして公明党が池田先生の提唱した中日国交正常化を外交政策の柱としていたことを、十分に把握していたことがうかがえます。これは、周総理が1960年代初頭から創価学会に関心を寄せ、その動向を理解してきた結果であり、同時に池田先生の「日中国交正常化提言」に対する全面的な肯定の証しとも言えます。

周総理が池田先生と創価学会を重視した背景には、中日友好事業をいかに戦略的に推進するかという視点がありました。創価学会が日本社会の民衆の中に幅広く根を張る、一般市民を基盤とする大衆団体であること、平和を希求し、戦争、とりわけ日本軍国主義による中国への侵略戦争に反対してきた団体であること、一貫して中日友好を掲げて推進してきた団体であること、正しい歴史観を持ち、その会員を長期にわたり教育してきた団体であること、そして、中日友好関係の確立と発展、また両国民が末永く友好を育んでいくうえで、卓越した貢献を果たしている団体であることを、周総理は的確に見抜いていました。また、創価学会のこうした方針と性格は、歴代会長、なかでも長年指導的立場にあった池田先生の英断と指導と深く結びついています。これこそが、周総理が創価学会に強い関心を寄せ、病床にありながらも池田先生の会見を強く望んだ理由にほかなりません。

以上の歴史的経緯を踏まえると、周総理と池田先生、そして創価学会との交流は、両国の国民が世代を超えて友好を育んでいくという共通の目標を基盤として築かれたものであると結論づけることができます。このような広い公の心、すなわち「大公の心」こそが、周総理と池田先生の深い友情を支えた根本的な基盤だったのです。

## 2. 大智立業（大いなる知恵で事業を成す）

中日両国は、二千年以上にわたる友好交流の歴史を有しています。しかし近代以降、日本の度重なる中国侵略は中国人民に計り知れない被害をもたらしました。さらに冷戦構造のもとで、両国が異なる陣営に属していたという政治的現実も重なり、中日関係の正常化は、通常の政府間外

交だけでは解決困難な課題となっていたのです。

こうした状況の中、周総理と池田先生は、真理を求める姿勢と理性的な態度、そして卓越した知恵によって、民間外交というルートからこの極めて重い課題に取り組み、その過程で両者の友情はますます深まってきました。周総理は、中華人民共和国建国以来、「民間外交こそが、中日両国民が世代を超えて友好を築き続けるための鍵であり、中日両国の関係は何よりも両国民間の友好を基礎としなければならない」と繰り返し強調していました。1950年代には、中日関係の膠着状態を打破するため、「民間先行、民が官を促す」という独自の外交思想を打ち出しました。

周総理は、「中日国交の困難な局面を打破するには、どのような手順を踏むべきか。我々の考えでは、まず中日両国民の間で国民外交を進め、そこから半官半民の外交へと発展させ、そしていつの日か必ず、中日は国交を回復するだろう」と述べています。さらに、「人民が往来するだけでなく、人民が政府に影響を与え、政府の態度を変えていくことで、両国は真に友好になれる」と述べ、「以民促官」という民間外交の理念を明確にしました。周総理自身、この理念を実践し、1953年7月1日から1972年9月23日までの約20年間に、日本からの来訪者や代表団を287回、延べ323団体も接見しています。この莫大な努力と献身は、日本国民からの深い敬愛を集める結果となりました。日本の元首相・三木武夫は、「周恩来総理ほど、日本のあらゆる階層の人々から多くの友人を持ち、尊敬された外国政治家はいない」と語っています。

一方、池田先生も同じく、「天下の事を自らの使命とする」という信念のもと、民間レベルの外交活動を重視してきました。民間交流を出発点として、一般の人々と連帯しながら、世界の平和を目指して行動してきたのです。中日関係について池田先生は、「国家と国家」ではなく、「民衆と民衆」に視点を置くことこそが、現状を突破する鍵であると確信していました。

こうした思想に基づき、1968年9月8日、池田先生は命を賭して「日中国交正常化提言」を公に発表しました。複雑に絡み合った中日国交正常化の問題に対し、演繹的な方法による解決を提示しました。まず両国の首脳が対話を通して平和に対する基本的共通認識を確認し、大局的視点と基本方針から協議を始め、それを実行に移した上で細部の問題に進むべきだと指摘したのです。

さらに池田先生は、中国問題解決のための「三位一体」の包括的構想を示しました。それは、①中日国交正常化の実現、②中国の国連における合法的地位の回復、③中日貿易の拡大という、相互に切り離すことのできない3つの要素から成るものでした。日本の著名な中国文学研究者・評論家である竹内好氏は、この提言について、「形式上は宗教団体内部での発言であるが、本質的には国民全体に関わる重大問題を提起したものであり、信仰の立場を超えた共通課題として受け止めるべきだ」と高く評価しています。

総じて、周総理と池田先生はともに、「中日両国が世代を超えて友好を保つための鍵は、両国人民の友好にある」という確信を共有していました。池田先生はこれを、「総理が最も重視していたのは第一に民衆、第二も民衆であり、日中友好においても『民衆本位』で推進していた」と語っています。この共通認識こそが、両者が中日世代友好という偉大な事業に尽力する精神的基盤となったのです。

中日国交正常化を進める具体的な過程においても、周総理と池田先生の知恵は随所に光を放ちました。なぜ公明党が中日友好のパイプ役となったのか。その発端は、松村謙三氏が池田先生を誘い、共に訪中することを提案し、「周恩来総理に紹介する」と明言したことにありました。池田先生は松村氏の期待を十分に理解していました。しかし、国交回復の推進は本質的に政治の領域であり、政治家でなければ効果的に動かせないと考えていました。また、自分が宗教者として文化大革命のさなかに中国を訪れることで、松村氏や中国側の友好関係者に迷惑をかけ、中日国交正常化という大事業に支障をきたすのではないかと案じていました。そのため、彼は丁寧に辞退し、代わりに自ら創設した公明党が旗振り役を担うことを強く望んだのです。

松村氏の紹介により、1971年6月に公明党代表団が初めて訪中を実現し、「中日友好協会代表団と日本公明党訪中代表団による共同声明」を発表しました。ここで示された「復交五原則」は、その後の政府間交渉の重要な指標となりました。その後、ニクソン大統領の訪中が発表された時、日本政府はまだ慎重な姿勢を取っていましたが、1972年7月の第3次訪中において、公明党が中日両政府間の連絡パイプとして機能し、田中角栄首相が、自ら代表団を率いて訪中する決断を下すことを後押ししました。政権発足から2ヶ月での訪中実現は、松村氏、池田先生、公明党などの水面下の推進があってこそその歴史的展開であったと言えるでしょう。

さらに、中日国交正常化の実現には、周総理の卓越した判断力が大きく寄与しました。例えば、公明党代表団が初めて訪中した際、交渉を担当した中国側は、共同声明に「米帝国主義への反対」を明記することを主張しましたが、公明党側は、それでは今後の交渉が立ちゆかなくなるとして受け入れを拒み、撤退を検討する事態となりました。代表団が荷物をまとめ、帰国を視野にいれていたと伝えられています。この状況を知った周総理は、直ちに中国側の代表者を呼び寄せ、「最も重要なのは国交正常化であり、核心は台湾問題だ。彼らはこの点を明確にしているではないか」と指摘しました。これは、大局を重んじる周総理の知恵を如実に示すものでした。こうして決裂寸前だった交渉は収拾され、周総理は外交慣例を破り、交渉継続中にもかかわらず自ら公明党代表団と会見しました。

会見冒頭、周総理は「池田会長によろしくお伝えください」と述べ、代表団を驚かせました。そして、「公明党の結党以来、私はあなた方の主張にずっと注目してきた。中日関係に関して、あなた方には素晴らしい意見があり、我々も高く評価している。この度、私たちが皆さんをお招きしたのも、こういうところから出発しています」と述べました。この会見を契機に交渉は急転直下で合意に至ります。

1971年7月2日、両代表団は共同声明に署名し、「復交五原則」を正式に打ち出しました。これは、中国の唯一合法政府の承認、台湾問題の中国内政問題化、「日台条約」の破棄、米軍の台湾撤退、中国の国連における合法的地位回復などを明確にしたものであり、後の政府間交渉の土台となりました。

この過程を通じて、周総理と池田先生の友情もさらに深まりました。池田先生は宗教者として前面に立つことを控えましたが、中国側は彼が果たした決定的役割を十分に理解していました。

黄世明氏の回想によれば、池田先生の「提言」は交渉資料として配布され、公明党の五原則にもその思想が色濃く反映されていました。周総理が公明党代表団に最初に述べた言葉が、池田先生への挨拶であったことは、その象徴と言えるでしょう。

1970年代初頭に『朝日新聞』北京支局長を務めた秋岡家栄は、「周総理は、公明党代表団を池田大作会長の使者として見ていた」と述べています。

### 3. 大信伝世（大いなる信頼を後世に伝える）

周総理と池田先生の間には、まさに心からの深い信頼関係が築かれていました。その象徴的な出来事が、今からちょうど50年前の1974年12月5日夜に行われた会見です。重篤な病に伏していた周総理は、医師団の強い反対を押し切り、池田先生との会談に臨みました。本来は5分程度の予定であったにもかかわらず、会談は30分余りに及んだと伝えられています。

会談の中で周総理は、「池田会長は中日両国人民の友好関係の発展はどんなことをしても必要であるということは何度も提唱されている。そのことが私にはとてもうれしい。創価学会と公明党がその目標に向かって積極的に取り組んでおられるが、私たちがともに抱く願望に合致しています。中日友好が今日まで発展できたのは、私たち双方の努力の結果であり、そして、私たちはその努力をこれからも続けていくよう希望します」と語られました。

続いて周総理は、深い思いを込めて「20世紀最後の25年間は、世界にとって最も大事な時期です。お互いに平等な立場で助け合い、努力しましょう」と述べました。そして池田先生に向けて、「あなたが若いからこそ、大事につきあいたいのです」と言葉をかけました。

この会見に直接立ち会い、日本語通訳を務めた林麗韞氏も、20年以上が経過した今なお、その場面を鮮明に記憶していると語っています。彼女が強く印象に残った点として挙げているのは、第一に、両者が「相見雖晩、相知甚深（出会うのは遅かったが、長年の知己の如し）」という関係であったことです。会見冒頭、池田先生は周総理の右腕に手を添え、抱き寄せるようにその手を握っていました。周総理も池田先生を深く見つめ、心から喜んでいる様子だったといいます。会談中の2人は非常に打ち解け、初対面とは思えないほど自然で温かな雰囲気の中で語り合っていたと、林氏は回想しています。

第二に、病中の周総理が、池田先生の中日友好への貢献を高く評価し、中日関係、さらにはアジアと世界の平和についても熱心に語り続け、まるで池田先生に中日友好交流の未来を託しているかのような様子であったといいます。

この短い会見は、池田先生にも忘れがたい体験となりました。重病の身でありながら会見に臨んだ周総理の姿に心を打たれ、自らが担う責任の大きさを痛感したのです。池田先生は、この会見を、周総理が命の火が尽きようとするその直前に、命を賭して若い世代に伝えようとしたメッセージであったと受け止めました。その核心は「中日は世々代々友好を続け、永遠に戦争を起さず平和を守り抜くべきだ」という強い願いでした。

池田先生は周総理について、「真に政治を理解した人」、「人々の心をつなぐ人」であったと評

しています。難題に直面しても、周総理はまず互いの心を開き、誠実で揺るぎない精神で問題解決にあたったからです。

1999年、私が創価大学を訪問した際、池田先生にお会いする機会があり、私は「周総理の言葉をどのように受け止めておられますか」と質問しました。すると池田先生は、「最も重要なのは互いの信頼であり、信義を貫くことです。人間としての相互理解と尊重を基礎に、共に未来を見据えていくことだと強く感じています」と語りました。

「民をもって官を促す」という周総理の姿勢は、日本に対する一貫した行動方針でもあり、常に民衆を中日友好の基盤に据えるという理念が、周総理の対話には貫かれていました。政治や経済の関係も重要ではあるが、それ以上に、民衆の意志を重視し、民衆同士の交流を深めてこそ真の相互理解が育まれる、というものでした。池田先生は、周総理から託された使命を深く自覚し、中日友好、さらにはアジアの平和と幸福のために尽くすことを誓いました。

このような経緯から、池田先生は1974年から1997年にかけて、10回にわたり中国大陸を訪問しました。国交正常化によって軌道に乗り始めていたものの、その基盤はまだ盤石とは言えませんでした。21世紀に向けた中日友好の希望は確かに芽生えていたものの、その輝かしい朝陽を迎えるためには、さらに多くの努力が求められていたのです。

そのため、中日友好の未来を左右する重要な時期に行われた池田先生の10回の訪中は、いずれも格別に大きな意味を持っていました。これら10回の訪中が、周総理が会見の際に特に強調した「20世紀の最後の25年間」という、世界にとって最も重要な時期に集中している点は、特筆に値します。文化交流や教育交流を主軸とした池田先生の10回の訪中は、まさしく周総理から託された「中日友好を推進する」という使命を、具体的に実践した歩みであたったと言えるでしょう。

さらに池田先生は、「文化交流は相互理解を育み、精神的交流は相互の信頼を生み出す」と確信していました。人民と人民の「心の交流」を育み、開拓していくことこそが、「不信と憎悪を、信頼と友情へと転換させる力になる」と考えました。

この理念に基づき、池田先生が指導する創価学会や創設した民主音楽協会、東京富士美術館、創価大学などの諸機関は、30年以上にわたり中日友好を目的とした多様な文化・教育交流活動を展開してきました。

こうした友好活動について、元中国駐日大使の陳健氏は次のように高く評価しています。「池田大作先生は、これまで何度も大規模な代表団を率いて中国を訪問し、両国の間に友好の“金の橋”を築かれた。また、教育・文化分野の交流にも並々ならぬ情熱を注がれた。創価大学は、日本で最も早く、新中国からの留学生を受け入れ、中日友好を担う人材の育成に大きく貢献された。これらの事実は、民間における教育と文化の交流こそが中日関係発展の重要な基礎であり、原動力であることを確実に示している」。

さらに池田先生は、中日友好を世々代々に伝えるため、日本の青年に大きな期待を寄せ、日本の青年が中国への理解や親しみを育み、中日両国の世代を超えた友好の基盤を築くことを、特に

重視していました。

池田先生はかつて、第一次の訪中の際、中国側から、誰と会いたいかと聞かれ、「青年に会いたい」と答えられたといいます。まさに政治家以上に偉大な教育者であられたといえます。「世々代々の友好」を築くことによってこそ、「明るい中日の未来」を開くことができる。その点において、周総理も池田先生も、常に最も重視していたのは青年でした。

私ども南開大学の学生団体「周恩来・池田大作研究会（以後、周池会）」の教職員として、私自身も池田先生のこの思いを強く感じてきました。

2006年、周総理と池田先生の会見から32周年を迎えた際、南開大学において学生団体「周池会」を発足させました。同会は、次世代を担う青年たちが、周総理と池田先生の精神を受け継ぎ、中日友好、世界平和のために尽力できる人材へと成長することを目的としています。

池田先生は、周池会に参加する教職員や学生に向けて、これまで4回にわたりお手紙を寄せてくださいました。いずれも青年への深い期待と、周総理への敬慕の念に満ちたものでした。発足当初、最初にいただいたお手紙には、次のように記されています。「当時、周総理は40代の若い私に最大の礼を尽くしてください、『あなたが若いからこそ、大事に付き合いたいです』と言われました。私も周総理への感謝と報恩の心を込めて、青年たちを重視し、共に行動してきました。私は、21世紀の世界の指導者となる皆さんが、周総理の人民のために全力を尽くされた崇高の精神を受け継ぎ、世界平和と日中友好の志のために戦っていくことより素晴らしいことはないと思います」。さらに、「皆さんが一堂に集いあうことは、21世紀の日中友好の新たな道しるべとなり、そして世界平和の新たな出発点となるでしょう。時間の経過につれ、皆さんが偉大な計画を推進され、ますます光彩を放っていかれることでしょう」と励まされました。

2007年1月2日には、周池会の学生が、池田先生の誕生日に際して、お祝いカードと、自作の会歌『私たちの誓い』を録音したテープをお贈りしました。それに対し池田先生より、「皆さんこそが、21世紀の日中友好と世界平和を担う若きリーダーです」との力強い激励の言葉が込められたメッセージをいただきました。

また、2015年に池田先生から寄せられたメッセージの中では、周総理と鄧穎超夫人が若き革命戦士として掲げた目標が「革心」と「革新」であったと言及しています。あらゆる悪を打破する力の根源として、新たな価値を生み出す「革新」を実現するには、精神を磨き鍛えていく「革心」が不可欠であるという洞察です。池田先生は、青年たちの対話こそが「明日の希望を響かせるメロディー」であり、青年の友情こそが「平和の絆を結ぶ鍵となる」と強調されました。

また、2015年12月5日、池田先生は南開大学周池会に向けてメッセージを寄せ、「南開大学の至るところに、私が尊敬してやまない周恩来総理の偉大な精神が息づいている。中日の青年たちが交流する姿には友誼と希望の未来が溢れています。周総理が、この温かな交流の様子をご覧になったら、どれほど喜ばれることだろうか」と励ましを送ってくださいました。この周池会は、周総理と池田先生が切り開いてきた事業を「未来に向けて若い世代が継承する」という使命を担っています。

#### 4. 大愛永生（大いなる愛は永遠に生き続ける）

以上の考察から、周総理と池田先生の友情は、単なる個人的な親交にとどまらず、人類の平和という「大公の心」を持ち、多様な文化の中で調和ある世界を築こうとする「大いなる智慧」に溢れ、困難に直面したときに身を挺して行動する「大いなる勇氣」、そして違いを直視し、率直に交流することで築かれる「真の信頼」を体現していました。この「大公」「大智」「大信」の精神の背後には、常に「人民を最も大切にする」という大いなる愛の価値観が貫かれています。ここにこそ、周総理と池田先生の友情の神髄があると言えるでしょう。

周総理と池田先生の最も重要な共通点として、「人民根本」があります。お2人はそれぞれの関心や問題意識から出発しながらも、「一人ひとりの心の深い部分を豊かにしていく」という姿勢を持ち続けました。その歩みは、人々が幸せを実感し、平和へと向かっていく上で、実に大きな影響を及ぼしてきたと思います。

私が創価大学の学生や、創価学会の若い会員と接するたびに感じるのは、池田先生が若者一人ひとりにどれほど心を砕き、気をかけてこられたかということです。それは単なる普遍的な配慮ではなく、困難に直面する個々の胸に届くような、きめ細やかな配慮だったと強く思います。

池田先生は常に、「一人に寄り添う」ことを原点とし、その行き着く先は「人類の幸福」でした。人類の幸福のために力を尽くすことこそ、周総理と池田先生が生涯をかけて追求した目標だったのです。「人民がまず幸福でなければならない」という考えを中心に据え、民間外交を政府外交の壁を突破する重要な手段として重視されたのもそのためです。結果として、中日国交正常化という歴史的な偉業を成し遂げただけでなく、中日が世々代々の友好を築くための根幹と道筋を示し、未来に向けて平和と友好の扉を開かれました。

池田先生と周総理にとって、最終的なゴールは単に国交正常化ではありません。お2人が目指したのは、「世々代々にわたる永遠的な友好」であり、中日友好を世界平和の基礎とするという考えでした。その根底には、言うまでもなく「人民本位」の精神があります。

お2人の見据えていた「人民」とは、国家や民族を超えた「世界の民」であり、人類の平和的共生こそが最終目標でした。お2人は実践において、人間生命の尊厳を基盤とし、人と人の平等な交流と対話を道とし、国と国の相互尊重を橋渡しとして、人類運命共同体の構築へ向かう平和友好の道を模索されました。多くの民衆の力を結集することで、世界の秩序を正しい方向へ進められると考えられたのです。

今日、経済のグローバル化が試練に直面し、世界の構造と国際秩序が大きく揺れる時代にあります。この「百年に一度の大変局」にどう向き合い、危機の中から新たな機会を育み、変動の中で新たな局面を切り開くかは、人類の存亡に関わる極めて重大な課題です。この時代にあって、周総理と池田先生の平和友好の思想と実践を深く、体系的に総括し、その中核をなす人民本位の理念を明らかにすることは、理論的にも現実的にも極めて大きな意義があります。

人民本位の理念は、人類文明の本質を体現すると同時に時代の潮流を示すものです。周総理と池田先生が人類文明の進歩を導いた偉大な政治家であったことを鮮明に伝えます。またこの理念

は、国家・利益集団間に築かれた壁を打ち破り、平等で開かれた対話と交流の体制づくりに寄与します。広範な民衆の力を結集し、世界の秩序を協力と共生の方向へ押し進めることを可能にします。

トインビー博士との対談にも示されたように、21世紀は経済の一体化を基盤に、政治や文化の分野でも統合の突破口が求められる時代に入りました。周総理と池田先生の「世界市民」の視点には、人民・民族・人類を結びつけようとする一貫した理念が貫かれています。それは人類社会における政治的・文化的一体化を実現するための思想的基盤となっています。

昨年11月15日、敬愛する池田先生が逝去されました。私たちは「ポスト周・池田時代」に入りましたが、この重要な時期に創価大学を訪問し、周総理と池田先生の研究を進める皆様と交流できたことは、大変意義深いことです。

今後、周総理と池田先生の精神と遺産をどのように未来へ受け継ぐか。それを確かな形で次世代へ伝えることには大きな価値があります。今後さらにお2人の会見に込められた精神を学び、その理念を行動として体現し、世界と未来へ広げていくことが重要だと強く感じています。

今後とも皆さまのご支援とご指導を賜りたく存じます。本日は、私自身の思いも交えてお話しさせていただきました。誠にありがとうございました。